

第七章 初期ド・ゴールの政治思想

——「フランスの栄光」という保守主義——

第一節 はじめに

以下の論考は四つの部分に大別される。一つは、保守主義というものをフランスの第二次大戦前夜の状況のなかで考察すること。つぎに、その状況における保守主義者のひとり、シャルル・ド・ゴールを、彼の出生時にまで溯ることによって、時代と経歴を調べてみる。さらに、ド・ゴールの一九二〇年から三〇年代にかけての主要な著作にあたりながら、彼の思考の傾向性を探ること。最後に、以上の観察をふまえて、フランスの保守主義とド・ゴールの関係についての筆者の見解を試みる、というふうになっている。

ここで、なぜ、初期ド・ゴールに焦点をあてたか説明しておきたい。ド・ゴールは、いうまでもなく、第五共和制の創設者であり、大統領として十一年間にわたり最高権力をほしのままにした。また、第二次大戦中は「自由フランス」を率いて、ドイツに抵抗し、ついにフランス本土を解放に導き、一九四四年には首相になった。しかし、これらのことは、本章ではすべて省略されている。むしろ、政治家ではまだなかつた頃のド・ゴールを中心に論じてある。一九四〇年六月十八日、ロンドンのBBC放送から感動的な放送によつ

て、フランス国民、いな世界中によびかけた当時のド・ゴールとは、どんな人物だったのか。それを、筆者の考えるフランス保守主義の文脈のなかで、追求してみたいというのが、この章の目標となっている。

第二節 第二次大戦前夜のフランスの保守主義

まず、保守主義をどう定義するか、であるが、ラルース社の一九七九年版の『政治辞典』を参考にしてみよう。そこには、「保守主義」(conservatisme)の項目に、つぎのように記されている。

「変化の拒否と不動の価値へのゆるぎない信頼によって決定される精神的態度。保守主義は進歩に対する障害となる。それはフランス人の心性に深く刻みこまれていたし、ナシヨナリズムとともに、フランス精神の基本的な構成要素である」⁽¹⁾。

フランスは保守的であるとか、フランス人は頑固であるとかよく言われるのは、上記の保守主義の定義と無縁ではない。政治思想としての保守主義をみる場合、とくにフランスの第二次大戦前をあつかう本章においてはいつそうそうなのであるが、このようないわば生活態度としての保守主義とわがちがたく結びついた保守主義を重視したいと思う。「どのような時代と社会においても、人々は、エスタブリッシュメントに属する人たにかぎらず、彼らが育った環境と価値体系の連続を欲する」⁽²⁾ものだからである。そのような人々の欲求(非イデオロギーとしての保守主義)をたくみに組織する指導者がいるとすれば、そのような指導者の政治思想を分析することが、ひとつの政治思想としての保守主義の解明に役立つと信じるからである。⁽³⁾

政治思想としての保守主義の歴史的起源や変遷については政治思想史の専門家にゆだねるとして、第二次

大戦前夜のフランスの保守主義を概観するまえに、本章全体の叙述に入る最低の手がかりとして、日本の研究者の保守主義に対する見解を二つだけ紹介しておくのが有益であろう。

第一に、小松茂夫は、保守主義の一般的特質としてつぎの五点をあげる。⁽⁴⁾当然のことながら、以下は筆者の問題関心にしたがって要約している。①思想形成の反定立(antithesis)性。外からの衝撃によってのみ、自己の価値意識を自覚しうる。②思想内容の他者被規定性。なにを「保守し」、なにを「改善する」かという問題意識が、定立された思想によって限定されざるをえない。③高度の状況的機動性。保守主義の精髓はその理論的「容姿」よりも、その「状況」統御能力にある。④無原則的状況主義ではない。保守主義はある程度の原則性をもっている。⑤貴族主義。保守すべき価値内容としてつねになんらかの貴族主義がある。

小松の論文は、イギリス政治史をバック・グラウンドとして保守主義を論じたものであるが、それらを捨象してもすぐれた概念規定であると思われる。また小松は、E・バーク、B・ディズレーリ、W・チャーチルの三人を保守主義者の典型として想定しているが、これらはいずれも現実の政治家であった点において、本章の主題であるド・ゴールと大きく関連してくると考えられよう。

第二に、丸山真男は、反革命・反動・保守の概念の区別について、これらの三つの言葉が時間的なずれをもって政治的舞台に登場してきたことについて、つぎのように言う。

「このように反革命・反動・保守の三つの言葉が僅かではあるが、時間的なずれをもって順次に政治的舞台に登場して来たということは、単なる偶然といえればそれまでだが、そこには各々の本来の意味合いが象徴的に暗示されていないだろうか。すなわち、「反革命」は革命と対語であり、現実にもつねに革命過程の開始にほとんど踵を接して現われる。これに対して「反動」という範疇は「動」の過程がある時間的な幅

で継続し、しかもそれが社会の深層までゆるがすものだという感覚が一般化してはじめて、それを押しさえそうという動向との揉み合いが、なまなましい力学的イメージをよびおこすわけである。最後に、保守は文字通り conserve することであるから、反革命や反動の概念がもともと消極的で反対的なものにとどまるのところが、保存すべき価値の積極的な選択が前提されている。したがって、単に衝動的、感情的なものがある反省にまで高まらぬと出て来ないので、革命過程などでは前二者に比して登場が遅れても不思議ではないことになる⁽⁶⁾（傍点原文）。

本章の主題に関連して、あらかじめひとつの問題点だけ指摘しておけば、丸山が保守主義を「登場が遅れても不思議ではない」としている点である。ド・ゴール主義は遅れて登場したフランスの保守主義のひとつではなからうか、というのが筆者の本章における問題意識である。

さて、第二次大戦前夜（一九三六—四〇年あたりを目安に考えている）のフランスの保守主義は非常に複雑な状況を呈していたといわなければならない。

ここで、いささか図式的に第三共和制の政治思想⁽⁷⁾を腑分けするならば、実証主義のコント、テヌス、ルナンに対して、非合理主義のモーリス・バレス、シャルル・モーラス、ジャック・マリタンを考えることができる。また社会主義のゲード、ジョレス、レオン・ブルムらの系列に加えて、アランの急進主義が第三共和制の左翼の部分形成してゆくとすれば、それらのネガの部分、かならずしも右翼と断言できないが、シャルル・ペギーの神秘主義とジョルジュ・ソレルのサンディカリズムをあげることができよう。もつともこれは時間のずれ、思想家たちの間の差異、一人の思想家の思想的变化を無視しているわけである。ところで、フランスの保守主義はこれらとどのように関連するか考えてみると、実証主義、非合理主義、神秘主義に共

通するものをもつといえよう。筆者は、フランソワ・ゴゲールのいう既成秩序派 (Ordre établi) と運動派 (Mouvement) という区別⁽⁸⁾にしたがって、第三共和制期の保守主義者を既成秩序派とほぼ同じものと考えてよいと思っている。左翼と右翼という区別もフランスの政治思想ではよくなされるが第三共和制では、反革命や反動を極右とするならば、右翼イコール保守主義者で構わないと考えている。問題は第三共和制末期、すなわち第二次大戦前夜になって、なにをもって既成秩序派、あるいは右翼とするのか、規定が困難になってくるところにある。さまざまな保守主義が存在したといつてよいのかもしれない。

のちのべるように、ド・ゴールが、実証主義、非合理主義、神秘主義の流派の著作家たちに親しんで思想形成をしたと推測したいのは、このような文脈のうえにおいてである。

それにしても、一九三〇年代をすごしてゆくなかで、ファシズムの魅力、自由主義的保守主義のたとえばニューディールにみられるようなマス化、機構化を前にして、社会主義、資本主義、ファシズムの冒険を拒否する伝統的な保守主義は何に頼ればよいのであろうか？ フランスにおいてはたしかにアクション・フランセーズは自由主義的な民主主義を拒否する。しかし、周知のように、アクション・フランセーズはローマ教会から一九二六年に非難されるし、一九二九年の大恐慌やファシズムの勃興は、保守主義の与件を変えてしまうこと⁽⁹⁾になる。

このようにして、一九三六―四〇年は、フランスの保守主義者にとって極端な政治的緊張をひきおこしたことが理解できる。まず、「第三共和制」という政治システムが腐敗し機能しなくなった⁽¹⁰⁾。したがって別の見方をすれば、保守派だけでなく、共産主義者、社会主義者、カトリック派、急進主義者とともに第三共和制以外の道を探していたこと⁽¹¹⁾で共通する、ともいえるわけである。だから、第二に、共和主義的議会制度その

ものの廃止かどうかは別にして、なんらかの私たちでの革命ないし改革が必要とされることが保守主義者にも要請されることになる。自由主義者であるムーニエですら一九三三年に「革命はなされるべきであるか? 然り。そしてそれはわれわれの魂の深い要求である。このことはわれわれの青春の確信なのだ」⁽¹²⁾と書いたことがそれを象徴的にあらわしていると思われる。第三に、それは極左と極右の政治的暴力の風潮を強めることになる。その結果、政府の威信と制度の安定性はいつそう弱まる⁽¹³⁾ことになる。保守主義者が代替策もないままに、ドリオヤド・ラ・ロックを利用して、しかものちにすぐ見棄てる⁽¹⁴⁾という無定見をしめすのはそのあらわれであった。

一九四〇年五月、突如としてドイツが侵攻する。以前から「奇妙な戦争」と呼ばれていたが、ここに共和制は没落した。没落はすべてを一掃することによって保守主義者を窮境から救い出すことになった。何故なら、人民戦線によって手ひどい目にあわされた保守主義者にとっては、強力な国家だけが、脅かされている社会秩序を回復するものだと思われていた。だが、一九三四年に、ドゥーメルグの挙国一致内閣という彼ら自身による改革に失敗していた保守主義者にはそのような力は内在的にはなかった⁽¹⁵⁾。このようにして保守主義者の手づまり状況のなかで、ドイツが侵攻し、ヴィシー政府が成立することになったわけである。

ここはヴィシー政権論⁽¹⁶⁾を展開する場所ではない。ド・ゴール論との関連から必要と思われる問題点のみを指摘しておきたい。アンドレ・シエグフリードによれば、ヴィシー政権を単なる裏切りといったことですますことはできないという。当時のフランス国民の大部分がこの政権に希望をたくしたからだという。一八七一年と同じように、打ちのめされたフランス国民は平和を欲していた。あの時のフランス国民は徹底抗戦のガンベッタに従うことを拒否した。同じように今度は抗戦を主張するド・ゴールに従わなかった。そして、

このような情勢下で一九四〇年七月十日(国民議会在全権をペタンにあたえることを決議した日)、彼は祖国の大部分をまぎれもなく代表していた。多分ラヴァルはこの状勢を利用する機会をたくらんでいたのであるが、世論はペタン將軍しか知らなかった。⁽¹⁷⁾ 第三共和制末期におけるイデオロギーや議会のむだなおしやべりにあきた国民には「われわれが必要としているのはペタンだ」というスローガンが有効だったのである。⁽¹⁸⁾ それはまたヴィシー政権に国民革命の精神がみちあふれていたことを意味する。⁽¹⁹⁾

それではヴィシー政権の思想とはどのようなものであったのか。その基本精神は「労働・家族・祖国」といった定式が示すような保守主義であり家族主義 (paternalisme) であった。⁽²⁰⁾ それはフランス社会を維持していた基本的な精神構造であったといえよう。それは、伝統的なコンフォーミズム、とくに教会に支えられて、軍事にせよ民間においてにせよ何よりも権威の尊重ということを第一義とした。こういう意味で、ペタンはヒトラーやムツソリーニと比較することはできないのであって、むしろフランコを思い浮かべればよいわけである。

ペタンを支持した人たちがとくにド・ゴールを非難するのは、彼が長に従わなかったからである。それは軍事のみならず社会においても原則無視の例をあたえる。かれらの目には、「ド・ゴールたちの極道」は、権威に反抗する共産主義まがいの者たちよりもいっそう血迷った非愛国主義になるのだ。⁽²¹⁾

このようにして、支持者にとつて、ヴィシー国家は、フランスが一七八九年以来たどってきたあの有害な道を放棄した強力な体制であった。理論家たちは「純粹なフランス」という素朴な神話を作りあげた。しかし、現実とはいえば、これほど脆弱な体制はかつてフランスになかった。あらゆる政策決定はドイツの承認ないしは統制に服さなければならなかった。にもかかわらず、フランスは、少なくとも名目的には、多くの

点で弱体で、人為的で、無能ではあったけれども、しかもなお政治的な、社会的な、イデオロギー的な、永続的な意味をもつある歴史的な実体を代表していたレジームによって支配されたのだ⁽²²⁾。ヴィシー体制は、第三共和制の平和時においては眠りこんでいた、あいまいなままでいた右翼の願望と性格が暴露された⁽²³⁾、とM・アンダーソンは言う。ところでこの右翼のなかには、反革命、反動も含まれることは強調されねばならないが、保守もまた大きなウエイトをしめることが重要である。S・ホフマンによれば、ヴィシー体制は、大きくわけて、モーラス派、ファシスト、共和制と仲違いした保守主義者といった人たちによって構成される多元的な体制であったとする⁽²⁴⁾。彼らの共通する基本的な態度は、国家に対する不信であったわけだが⁽²⁵⁾、筆者の問題意識からすれば、反革命、反動とは別に存在する、言いかえれば反革命、反動と混在したかたちで表現されている第二次大戦前夜のフランス保守主義の一断面を見たいわけである。

かつて、横田地弘はつぎのようにのべたことがある。

「フランスには、たえず、公然、非公然を問わず、フランス革命やそれから生じた諸政治体制を認めない、いな、『人間個人ペルソン・ユネの尊厳という、文字通り革命的な感情』を決して民衆に認めない、反体制派が存続していた。……この右翼の地盤は、戦争によって掘り起され、左翼の崩壊、無抵抗のうちに、まず、モーラス派によるヴィシー政権（一九四〇年七月―四二年四月）樹立への道が開かれるであろう。最後に、戦時の抵抗運動から生れたゴリスムの中に、人はかつてのナシヨナリズムの感情的内容を再び見出すであろう⁽²⁶⁾」。

フランス革命やそれから生じた諸政治体制、さらに「人間個人の尊厳という革命的な感情」を民衆に認めない反体制派が存続していた、とする説は卓見だと思われる。このような反体制という基底の感情がフランス保守主義にあったことが、まず重要である。つぎに、「モーラス派によるヴィシー政権」という考えを筆者

はとらないことはさききのべたとおりであるが、ヴィシー政権に続いて戦時の抵抗運動から生れたゴリスム（ド・ゴール主義）をフランス右翼の「根深い潜勢力」とすることに、筆者はまったく賛成である。のみならず、それこそ本章のライトモチーフにしたいところなのである。問題はド・ゴール主義がどういう伝統のうえにたち、またどのようにして形成されてきたのか、だと思ふ。以下、一九四〇年六月十八日までのド・ゴールを明らかにしてみたい。

第二節 ド・ゴールの経歴——四十九歳まで

シャルル・アンドレ・ジョゼフ・マリ・ド・ゴール (Charles André Joseph Marie De Gaulle, 1890-1970) は、一八九〇年十一月二十二日、ノール県リール市プランセス街九番地において、父アンリ・ド・ゴールと母ジャンヌ・マイヨの次男として生まれた。

リールは母ジャンヌ・マイヨの故郷で彼女の家系はノール県のカトリックのブルジョアであった。⁽²⁹⁾ ノール県はフランス北部のフランドル地方に属し、古くから通商と産業に栄えた地方であった。この地方のブルジョアジーは、他のフランスの諸地方、たとえば西部や南部とちがって、簡素で勤勉な性格をもっていた。⁽³⁰⁾ フランスの保守政治においてユニークな特色をもった県であったということが出来る。⁽³¹⁾

父方の家系は、やはりフランス北部の小さな貧弱な貴族の末裔であった。ド・ゴール家は、一二一〇年になって、歴史上の文献に登場する。四代以前からパリに移住していた。財力はなかつたが、謹厳な役人やインテリを輩出することによって、ド・ゴール家の人たちはフランスの保守主義を支えていたということがで

きよう。⁽³²⁾

ド・ゴールにあたえた父の影響は重要である。父アンリ・ド・ゴールは、ジェズイット派によって創設された私立学校(enseignement libre)の教師であった。彼は無名であったかもしれないが、学校内では評判の教師だった。博学であるだけでなく、慈悲深く、彼の所作は、貴族的なまでに礼儀正しく、慎みのあるものであった。話しかたは、抑揚のある、その時代特有の感動的で説得的なものだった。⁽³³⁾

ただ、注意しなければならないのは、ド・ゴールが幼少時に育った家庭環境は、彼自身にとってどんなに恵まれたものであれ、フランス第三共和制の主流の精神とは別であったという点である。見方を変えれば、彼の家庭は、十九世紀末にフランスの右翼が信奉していた価値については、典型的であった。君主制への強い執着、熱烈なカトリック、愛国主義、そしてフランスの没落に対する恐れなど。これらはシャルル・モラスが呼びかけの対象にした家庭に顕著に見られるものだった。⁽³⁴⁾

ド・ゴールが生まれた一八九〇年は、第三共和制はまだ二十年しか経ていなかった。貴族、上流階級、軍、教会の世界に住む人たちにとって、「フランス万歳！」は「国王万歳！」と切り離すことは不可能だった。祖国、宗教、秩序、神、国王は大事なシンボルであった。⁽³⁵⁾

とはいえ、父アンリ・ド・ゴールは、レジティミストであったとしても、共和主義に対する激しい憎悪、反ユダヤ主義、そして右翼にきわめて特徴的な外国嫌いに動かされるようなことはまったくなかったといえよう。そこには党派心というものはなく、アンリは、ドレフュスが有罪だとは信じていなかった。彼は中庸の人であり、現実家であった。息子のド・ゴールはこれらの特質を受けつぐことになる。⁽³⁶⁾

ここで、ド・ゴール自身が『大戦回顧録』の冒頭で彼の「生を享けた環境」についてのべているところを

引用しておこう。彼は「フランスは偉大さなくしてはフランスたりえない」という信念を感動的に披瀝した⁽³⁷⁾あと、この信念が幼少時の彼の家庭に由来するものであることについてつぎのように言う。

「この信念は、私が生を享けた環境のなかで、私と同時に成長してきた。思索と教養と伝統の人間である私の父には、フランスの尊厳に対する感情が滲み込んでいた。彼は私にフランスの〈歴史〉を啓示した。

……わが国の栄光の象徴である、ノートルダム寺院のうえに降りてくる夜闇、ヴェルサイユの夕べの壮麗さ、陽光を浴びている凱旋門、アンヴァリッドの円屋根のしたにかすかに揺れる分捕った軍旗、こういったものにもまして、パリにきた幼少なりール人の心を打ったものはない。⁽³⁸⁾」

少年期のド・ゴールは、軍隊あそびをするか、「氷室に落ちこんでしまったシャルル」と言われるくらい、人とあまり話をせず、読書と詩作に熱中した。彼の伝記から、彼が読んだといわれる目ぼしい作家を列記すれば、エドモン・ロスタン、ニーチェ、ベルグソン、モーリス・バレス、シャルル・ペギー、シャルル・モーラスらの名があげられるだろう。⁽³⁹⁾

彼はやがてサン・シール陸軍士官学校の入学試験準備をすることを決心する。彼の家庭環境からすれば、軍人という職業はあたりまえの理のある選択であつた⁽⁴⁰⁾だろう。父親アンリも一時は軍人を志していた。しかし、当時のフランスの政治的環境からいえば、そうではなかった。ドレフュス事件がどういう意味をもつか、少年ド・ゴールにとって理解できなかったにしろ、父親アンリの世代にとっては衝撃だった。事件は軍の威信を低下させていた。沢山の士官が辞職した。そして、サン・シール陸軍学校への入学志願者は大幅に減少した⁽⁴¹⁾。前世紀末に二〇〇〇人の志願者があつたのに一九〇八年には七〇〇人にすぎなくなつたくらいであった。⁽⁴²⁾

ド・ゴールは一九〇九年に合格し、一九一二年に十三番の成績で卒業する。

ド・ゴールが士官学校在学中にアガディール (Agadir) 事件が起きたことは注意されてよい。この一九一一年七月の第二次モロッコ事件は、やがてポワンカレ内閣成立⁽⁴³⁾(一九一二年一月)の重要な契機となるものであり、時代は反教権主義の雰囲気から国家主義者の復活へと転換してゆくことをしめしていた。アンリ・マシスとアルフレッド・ドウ・タルドが、アガトンのペンネームで当時の青年の意識を描写した評判の書、『現代の青年たち』(一九一三年)⁽⁴⁴⁾の調査はド・ゴールが卒業した一九一二年におこなわれている。これによれば、当時の若いインテリたちが、一八九五年頃二十歳であった人たちとくらべて、まったく異なっていることをしめしている。一九一二年の青年は、伝統主義者であり、国家主義者であり、カトリックであり、スポーツ好きであった。彼らは、バレス、ベルグソン、ペギー、ルナンの孫プシカリを崇拜した。戦争が来ることを感じている青年たちであり、それを待ちのぞみ、召集をあてにしている者たちであった⁽⁴⁵⁾。「ナシヨナリズム」の復活によって、ド・ゴールの両親や教師たちが培った価値のあるものが、再び輝きを取り戻すにいたった⁽⁴⁶⁾。

ド・ゴールはつぎのように回顧している。「私の少年時代は、……つぎのことを信じて疑わなかった。すなわち、フランスは巨大な試煉を経なければならないのだ、……と」⁽⁴⁷⁾。

一九一四年、第一次大戦が勃発する。アガトンの時代のヒーローであるペギーも、プシカリも戦死した。一九一三年中尉になっていたド・ゴールも従軍し、一九一四年、一九一五年、一九一六年の三度にわたって負傷する。三度目の負傷の時には捕虜となり、戦争の終結まで、三十二カ月、ドイツでの収容所生活を送ることになる。この抑留のおかげで、彼はドイツの文献をとおして戦況を把握することができたし、歴史的な

把握も可能になった。これはのちの彼の処女作に結実する。また捕虜の仲間には、のちのカトルー将軍や、ソ連の赤軍の総指揮官になるトハチエフスキーらの知友を得ることができた。⁽⁴⁸⁾

第一次大戦後、ポーランドへの軍事使節の一員(一九一九年)、サン・シールでの一年間の軍事史担当の教官(一九二一年)をへて、陸軍大学で幹部候補生として、二年間、戦略と戦術の特別の教育を受けたあと、一九二五年十月、ド・ゴールは、ペタン元帥付副官に任ぜられた。元帥は当時陸軍省参事会副議長、軍総監、フランス軍の名譽総帥を兼ねていた。⁽⁴⁹⁾

一九二七〜二九年、一九三六―三八年、ド・ゴールは、後者の場合は少佐として、ラインラントの占領軍に派けんされる。そして、ドイツの侵入の危険性と、フランスの国防の不適切さをまのあたりに見ることになる。また二九年には軍人としてシリア、レバノンを視察している。

著作家としての活動も始まる。一九二四年『敵方における不和』、一九三二年『剣の刃』、一九三四年『職業軍隊のために』というふうに出版される(これらの内容については、次章でふれる)。一九二七年四月には、ド・ゴールは大尉になっていたが、ペタンの司会によって、陸軍大学で「戦闘と指揮者」について講演する。この時期に行われたあと二度の講演も含めて、これらは『剣の刃』におさめられるが、両三度にわたる講演は、ある人々を感服させ、ある人々を(当然ながら)苛立たせた。戦闘の指揮者のイメージについては、ある者はド・ゴールの自画像だと言ひ、他の者に言わせれば、ペタン元帥への臣従の礼であったという。当時存命中の軍の指揮者のうちで、講演の中に引用されたのはペタンひとりだった。⁽⁵⁰⁾

一九三〇年、ド・ゴールは国防最高会議事務局長になる。これについて、ド・ゴールはつぎのように回顧している。「私は、国防最高会議事務局長に任じられた。……一九三二年から一九三七年にいたるまで、調査

という次元で、こと国の防衛にかんするかぎり、政治上、技術上、行政上のあらゆる活動に参与した。⁽⁵¹⁾

一九三三年一月、隣国ドイツでは、ヒトラーが首相になる。十月には、ドイツは国際連盟を脱退して、軍備に関して行動の自由を得た。一九三四年から三五年にかけて、軍需生産と徴兵にかけて巨大な努力が、ドイツにおいて、なされることになる。この頃、ド・ゴールは四十代になっている。彼は国家の政策決定にかわる重要なスタッフの一人になった。また、そのことによって、彼はフランス第三共和制というひとつの体制の装置に安住している議員や軍人に失望を味わうことになる。現状肯定を保守主義者とすれば、ド・ゴールは改革を欲したわけであるから、保守主義者ではない。しかし、また保守主義者だったからこそ、第三共和制の指導者たちにあきたらなかつたともいえよう。

具体的にいうならば、ド・ゴールは、彼の著書『職業軍隊のために』の考えにしたがって、高度に機械化され動員力のある少数精鋭の特殊部隊を作ること提案した。これは当時のマジノ・ラインを信頼し、ドイツに対して十分な防衛は可能だとする静止的で固定的な現状肯定の一般認識に対する憂慮であった。政府や軍首脳のような戦術思想は、当然のことながら外交政策にも関連している。すなわち、双務的ないし集団的安全保障体制の確立を目標とする、一九二五年以来のフランスの外交政策と密接に結びついていた。ドイツとの一対一の戦争ではフランスには勝ち目はない、ドイツの脅威に対抗するためには、多数の同盟国の支持が不可欠であるというのが、フランスの指導者の絶対的確信であった。そこでとりあえず、同盟国の協調を求めながらフランスの軍事的努力は国境の要塞化のみに集中されることになったのである。⁽⁵²⁾しかし、ド・ゴールは、フランスのこのような軍事政策は、防禦作戦から攻撃作戦へと転換させなければならぬと考えた。

彼は有力な政治家や新聞を説得する行動を企てる。ド・ゴールの提案には、グラディエ、ペタン、ウエイガンが反対した。しかし、ポール・レイノーは理解をしめした。回顧録にド・ゴールはつぎのように記している。

「ポール・レイノー氏がとりわけ、この企てにふさわしいもののように思われた。彼の知性にかかる企ての根柢を認容するだけの力があり、彼の才能はそれを注視のたらしめ、彼の勇氣はそれを支持するだけの力があつたのである。⁽⁵³⁾」

ここで、ド・ゴールとペタンとの不和のいきさつをのべておこう。さきにのべたとおり、ド・ゴールの機械理論にペタンは賛成しなかつた。ド・ゴールはそれについて彼を非難するが、ペタンにしてみれば、かつての部下が高慢でもあり頑固でもあるのは我慢できなかつたにちがいない。一九三八年、ド・ゴールの『フランスとその軍隊』の出版をめぐつて、両者はぬきさしならぬ緊張関係にたつ。ペタンに言わせれば、ド・ゴールの名で著されているが、この内容は、かつてド・ゴールも加わっていたペタン・グループによる『フランス軍隊の歴史』の出版をめざした協同作業の成果である。⁽⁵⁴⁾むしろペタンの名前が付されなければならぬ。この争いは、一九三九年、ペタンがスペイン大使として出発したことで、⁽⁵⁵⁾結着がついたが、思うに、それはヴェイシー政府と自由フランスの双方のリーダーの前哨戦であつたといえよう。⁽⁵⁶⁾

一九三九年三月、ヒトラーによるチェコ占領、一九三九年九月、ポーランド侵入を契機として、九月三日、イギリスとフランスはドイツに宣戦を布告する。四十年一月、ド・ゴールは、機械化兵力の必要を訴える文書を、政府、政界、軍部の主だった人八十名あてに送り、「最後の努力」を試みた。⁽⁵⁷⁾五月、フランスに対するドイツ軍の総攻撃により、フランス占領が開始されてゆくことは、前節でふれた。四十年六月五日、ポール・

レイノーは、第二次内閣組閣にあたって、ド・ゴールに、国防次官として内閣入りを要請した。⁽⁵⁸⁾ド・ゴールの最初の任務はロンドンであり、六月九日、ウィンストン・チャーチルに初めて会見する。フランスはあくまで戦闘を継続するという観点からイギリス軍にさまざまな要求をした。しかし、チャーチルは戦闘継続には賛意を表しながらも、イギリス軍の援助については、これを基本的に拒絶した。⁽⁵⁹⁾

一九四〇年六月十五日、レイノーは休戦を欲する閣僚内の勢力に抗しきれず、辞職する。⁽⁶⁰⁾ペタンが首相に就任する。ド・ゴールの回顧録では「老齢とは難破である。われわれを完膚なきまでに打ちひしがんものと、ペタン元帥の老齢は、フランスの難破と一体にならんとしていたのだ」と喝破されているところである。六月十七日、ド・ゴールはフランスを脱出し、ロンドンに到着する。同日、すでにペタンは臨時政府の所在地、ポルドーから「わたしは、胸せまる思いをもって、戦闘をやめなければならぬことを今日諸君に告げる……昨夜わたしは相手方に和平の申込みをした……」と放送していた。⁽⁶²⁾

ド・ゴールは、翌日十八日、ロンドンのBBC放送からフランス国民に呼びかけて「私の言うことを信じていただきたい。私は、熟慮の上、フランスにとって何ものも失なわれてはいない、と諸君に告げるのであります。われわれをうち負かしたのと同じ手段が、他日われわれに勝利をもたらすことができるのであります」と抵抗をよびかける。今までのべてきたように、彼の行動には論理的で首尾一貫しているひとつの「保守主義」がみられると思われるが、心境としては孤独なたたかいであったにちがいない。⁽⁶⁴⁾なぜなら、彼は無名であったから。⁽⁶⁵⁾ド・ゴールはこう回想する。「一つの生涯が、すなわち私がこれまで堅固なフランスの、また不可分な軍隊の枠内でつづけてきた生涯がこれで終るのだ、と。私は四十九歳にして、……冒険のなかへ入っていったのである」。⁽⁶⁶⁾

ここから、本格的な「政治家」ド・ゴールの生涯が始まる。しかし、本章の目的は、ド・ゴールの初期の政治思想、すなわち政治家になる前のド・ゴール、トウシャルのたくみな表現によれば「ド・ゴール主義以前のド・ゴール」を追求することにある。彼の経歴をのべることはこのあたりで打ち切らなければならぬ。

第四節 ド・ゴールの初期の著作をめぐって

以下において、ド・ゴールの初期の著作を分析してみたい。

『敵方における不和』（一九二四年）はド・ゴールの最初の著書である。内容は第一次大戦におけるドイツのいくつかの軍と一般市民の関係の研究である。巻末に簡単なビブリオグラフィがついているが、ウィルヘルムII世、ヒンデンブルグ元帥、ルーデンドルフ將軍、ベートマンホルヴェーク帝國宰相、ティルピッツ大提督らの著書や回想録があげられている。一九一六年から二年半にわたるドイツでの捕虜生活における読書が役立つことは前節でものべた。

序文において彼はのべる。「ドイツの敗北は、フランス国民が、ドイツ人がその指導者のエネルギーにおいてさらにそれに従う者の努力においてすぐれている、との讃辞を敵方に送ることを妨げるものではない。しかし、始まりから終りまで、戦争の異常に大規模な性格によつて、彼らがおかさざるをえなかつた誤りについて、われわれは研究することができる⁽⁶⁷⁾」。

彼は戦争について、「戦争において、基本的な問題は、普遍的な体系はなく、あるのは、状況と人格だけで

ある⁽⁶⁸⁾」ということが、ドイツがプロシヤ時代の一八六六―七〇年の戦争の理論に依拠しすぎて敗れた教訓として、引きだされてくるという。これはのちに、マジノ・ラインの防壁に安住する、アプリアリな理論の虜になった、フランス軍の参謀本部への批判とつながるものをもっている⁽⁶⁹⁾。

『敵方における不和』は軍事史の書ではない。それは、市民権力と軍事権力の関係についてのべたもので、驚くべきことに、軍人ド・ゴールは、市民権力を軍事権力に優越させているのである。彼は決して軍国主義者ではなかった。「歴史は、ティルピッツ大提督と彼に鼓吹された海軍を許しはしない。彼は、政治の問題に介入して、帝国宰相からあらゆる手段を奪い取り、国民を狂暴で致命的な嵐のなかに引きこんだ罪をおかしたからである⁽⁷⁰⁾」。

ドイツにおける集団的意志、信頼、統一などが崩壊したおもな原因は、党派的な分裂、および軍事指導者の異常なまでの要求に対処する場合の非軍部系指導者の気力の不足にあった、として土気的重要性を説く⁽⁷¹⁾ことにもこれは関連してくるだろう。

ド・ゴールが少年期から青年期にかけて、ニーチェを読んだことはすでにのべた。しかし、それは、おそらく第一次大戦前のフランスにおける知的な雰囲気の中の流行にしたがったまでであって、この著作においては、ニーチェ的ドイツ人についてはいくらか軽蔑的に語られている⁽⁷²⁾。ニーチェの超人主義、並みはずれた感情に対して、ド・ゴールは調和を讃美し、古典主義にたちかえる。『敵方における不和』の序文で、フランスの庭園を称賛して、つぎのようにいう。

「フランス風の庭園にあつては、一本の樹木といえどもその影で他の樹木を窒息させようとはしない。花壇は幾何学的に設計され、泉水は滝と野心を争わず、彫像は賞讃されるために立ちはだかつてはいない。

時としては、ある高貴な憂愁がフランス風庭園から立ちのぼることがある。おそらくそれは、庭園のなかの孤立したそれぞれの要素がさらにもっと輝き立つことができたかもしれないのにという気分から生まれるものであろう。だがそんなことをすれば、全体が破壊されてしまうのだ⁽⁷³⁾。

ここにみられるド・ゴールの思想には、権力への意志とかエリート主義のようなものはない。また、反動とか反革命のような感情もない。発見されるのは、まぎれもなく、フランス流の保守主義ではないだろうか。『剣の刃』（一九三二年）は、前節でふれたとおり、三十七歳のド・ゴール大尉が陸軍大学でおこなった三度の講演にもとづいている。五年をへて、この書はなぜ出版されたのか。彼は序文でつぎのように言う。

「われわれは、あいまいな時代に生きている。多数の慣習は無視され、見透しははずれ、理論は馬脚をあらわし、多くの試練と損失と失望がわれわれを悩ませている。したがって既成秩序の指導者たちは緊張し、動揺している。軍隊は、つい以前に世界を変えてきたばかりだが、まず最初に苦しみはじめ、失われた栄光をなげいている。軍隊の憂愁は、その力が偉大であった時期を別とすれば、たぶん別に新しいことではない。軍隊では、平和時における虚妄の行動とその潜在的な力との間には大きなコントラストがある。それに直接携わっているものには痛切に感ぜずにはいられない失望させるものがある。……（中略）……このフラストレーションの感覚は、とくに戦争が終つたすぐあとの兵士たちに顕著にみられる。この気のゆるみはあまりにも突然である⁽⁷⁴⁾」。

ここで、前節でのべたド・ゴールの経歴をふりかえってみると、この著書が出版された頃、彼は国防最高会議事務局長であり、またヒトラーが首相になる数か月前だった。一九三〇年代のフランスの軍隊は一九一八年の勝利の思い出に耽るばかりだった。軍部の士気は落ち、使命感は希薄になっていた。ド・ゴールは、

彼らの意気沮喪に対して、また憂愁に対して、『剣の刃』を書いたのだった。彼は軍隊が誇りをもつことを求めたのである。⁽⁷⁵⁾

軍隊が誇りをもつには偉大な指揮官がいなければならない。「偉大な人物なくしては、偉大なことはなしえない。そして人物が偉大なのは、自分がそうであろうと決心した時にのみそうなのである。ディズレーリは青年時代から自分を総理大臣として考えることに慣れていた。フォッシュ將軍も、講義の時に、まだ海のものとも山のものともわからないうちから、あたかも総司令官のようにふるまっていた」。⁽⁷⁶⁾

このようにはなはだ伝統的に、あるいは伝統的武人らしく、⁽⁷⁷⁾士気を高めることを求めるのであるが、ド・ゴールがいわゆる軍国主義者でなかったことは『敵方における不和』の箇所でものべたとおりである。彼の事の勢いとか時の流れということの理解できる軍人であった。早くから政治家の資質をそなえていたといつてよいかもしれない。⁽⁷⁸⁾

さらに注目しておきたいのは、四十代のこの著書のなかで、ディズレーリを例に出してきたことの意味である。ディズレーリを語りながら、あたかもド・ゴール自身を語っているのではないかと思われること⁽⁷⁹⁾をまづ指摘しておきたい。つぎに、第一節で紹介したように、小松茂夫は、ディズレーリを、バーク、チャーチルとならんで保守主義者の典型としているからである。ド・ゴールの政治哲学には、他の哲学が混在しているのは事実としても、ディズレーリに似て、保守主義のそれがあるのではないのか、というのが筆者の見解である。

『剣の刃』のなかで、ド・ゴールは、やがて戦争がくるかもしれないので、フランスの軍事力の鎖がゆるめられることがあつてはならない、ということ、さらに、理想的な指導者（偉大な指揮官）を特徴づけて、理

論、気概、威信の三要素をもつ人間であるといっている。⁽⁸⁰⁾これはこの書の目次が「序言」、「戦闘行為について」、「気概」、「威信」、「理論について」、「政治と軍人」の六章となっていることに対応している。ここでは、気概をもつ人間に主としてふれてみたい。ド・ゴールは言う。

「自分の自我で行動しようとする情熱は、ある種の乱暴さをともなう。気概の強い人間は、その努力に内在する苛酷さを体現している」。⁽⁸¹⁾

「上官との関係では、彼はおおむね不利である。あまりに自信が強すぎ、あまりに自分の力を意識しているので、単に気に入りたいという希望だけで、自分の行動をすることができない」。⁽⁸²⁾

フランスワ・モーリヤックは、『剣の刃』の中の「気概」という章は、ひとりのフランス将校がただ自分自身の分析を行っただけで、予言が実現した不思議な場合である、といっている。そして、この当時から、ド・ゴールが人を喜ばすまいという方針を選んだこと、まるで自分が選び出され、指名され、任命されることが前から分かっていたかのように、この当時から身を慎んで孤独になったことに驚きの念を表明している。⁽⁸³⁾

モーリヤックはド・ゴールに傾倒しすぎており、政治思想の分析の手助けにするには注意が必要であろう。にもかかわらず、つぎのように言うことができる。すなわち、一九四〇年六月のド・ゴールの行動は、前節でふれたとおり、無名であり孤独であった。ゆえに、果敢であった。ところで以上の原理は『剣の刃』にすでに書かれてあったことなのである。ヒトラーの『わが闘争』、ナセルの『革命の哲学』とならんで、おのれの運命を感じとっていた未来の指導者の予言の書であるといったらよいのだろうか。しかも、ド・ゴールの場合、私小説風に「自分を曝け出す」というものでは全然なかったことが興味深いと思われる。⁽⁸⁵⁾

『剣の刃』が軍事哲学の書だとするならば、『職業軍隊のために』（一九三四年）は軍事戦術ならびに組織の

書である。『剣の刃』が予言の書だとするならば、『職業軍隊のために』は宣伝の書であった。

すでに前節でのべたように、ド・ゴールは、『職業軍隊のために』にのべられている機械化され動員力のあ
る少数精鋭の特殊部隊を作る提案を政治家や新聞人に説得してゆくわけだから、実践的な書であったともい
ってよいだろう。⁽⁸⁶⁾『大戦回顧録』には、初期の著作のなかでこの書の内容が一番詳細に紹介されている。⁽⁸⁷⁾

全体は二部からなっており、それぞれ三章ずつで構成されている。第一部「何故？」は、「防衛」、「技術」、
「政策」の三章、第二部「いかに？」は、「編成」、「使役」、「指揮」というふうになっている。

この書のモチーフは何か。第一部第二章「技術」の末尾において、彼は言う。

「機械化のもたらす進化のもとでは、数にたいして質が再びその重要性をとりもどしてきた。実際、海上
でも陸上でも空中でも、極度に強力で複雑な兵器を最高度利用する単一の精鋭部隊が、多かれ少なかれ
雑然とした兵群にたいして圧倒的な優勢を發揮する⁽⁸⁸⁾」。

何故、圧倒的な優勢を發揮するかといえば、機械化部隊には機動力があるからである。フランスはドイツ
にくらべて、青年の人口においても、工業資源においても不足するところ大であるから、塹壕戦では駄目な
のである。消極戦法に反対して、ド・ゴールは次のようにのべる。

「われわれの決定的戦闘は、快晴の日に、よい道路が何本も通っている大平原で行われる。侵略軍はライ
ン、モーゼル、アルデンヌ地方の森林に掩護されながら、進んで来て、突破口を作るために、どこからで
も攻撃のできる地点を見つけるのだから、時間と場所を選べる有利な態勢に恵まれている。守備軍がもし
消極的になっていると、不意をつかれ、釘づけになり、迂回されることになる。……準備したことを実現
することにかけてはならぶもののないドイツ軍も、相手に少しでも予期しない方法で叩かれると、応戦の

手段を見失い、不測の事態に適應できない例の不器用さを示すことになる。……従つてわれわれは、機動的な作戦を取りさえすれば、フランスを護ることができるとだ⁽⁸⁹⁾」。

このような機動的な作戦をとるためには、指揮系統の変革が必要であり、それは軍隊の変貌をとまなう。しかし、自力でそれをなすことはできないから、究極的には国家刷新を待たねばならない。軍人ド・ゴールから政治家ド・ゴールへの転進は、『職業軍隊のために』の結尾部分につきのように内面化されている。

「フランスを若返らせるための困難な仕事において、その軍隊は、抛り処として、また酵母としてフランスのために役立つであろう。なぜならば、剣は世の枢軸であり、偉大さは分割され得ぬものだからである⁽⁹⁰⁾」。最後に、『フランスとその軍隊』（一九三八年⁽⁹¹⁾）にふれなければならぬのであるが、すでに前節でペタンとの不和に係して論じたことと、スペースと時間的余裕がなくなつてきているので、本章では割愛して、他日を期したい。

第五節 残された問題——むすびにかえて

政治史と政治思想史の混同の危険について、エルトン⁽⁹²⁾は、トーマス・モアの例を引きながら、「モアは、実際は、彼の著書に書かれているのとはまったく別のことに専念していた」と主張している。ド・ゴールが政治家として行動したと、著述家として記したとの間にもなんらかの距離があるであろう。いわんや、第二次大戦後の第五共和制大統領の政治行動と政治思想を初期の政治思想の論理的帰結とみることは、明らかな誤りである。

筆者の主張はもっと別のところにある。すなわち、第二次大戦前夜のフランスにおいて、保守主義という「風潮」またはひとつの「時代精神」は現実的にはどのような表現になっていたのか。その象徴的人物として四十歳代のド・ゴールを選んだわけである。したがって、保守主義は、ひとりの理論家が体系化して維持しているものというよりは、当時のフランスの国防最高会議や議会に漂う政治的雰囲気と関係したものと、筆者は理解したのである。

具体的にはつぎのように考えてみたい。奇妙な考え方だが、とことわりつつ、F・モーリヤックは、「一九四〇年六月に、彼(ド・ゴール)を冒険に飛び込ませたのは保存本能(自分ではなく、フランスの保存本能)であった」とのべた⁽⁹³⁾。その場合、保存本能にもとづきながら、なぜ、ロンドンにわたってヴィシー政府に敵対するという孤・独・な・行・動という冒険が導き出されるのか? また、自分ではなく、フランスの保存本能というのはなにか? このあたりに、ド・ゴールの保守主義を問題とする糸口が見つかりそうな気がする。

まず、最初の問題であるが、保存本能と冒険は因果関係がないのではなく、あるのだといえよう。すなわち、ド・ゴールの経歴と著作をすでにみてきたように、彼の軍人から政治家へ転進してゆく論理は一貫している。論理だけでなく、行動に駆りたてたのは、彼のフランスと自分とは一体なのだという少年の頃からの信念である。

したがって、フランスの保存本能が、何故、彼と一体化したのかという第二の問題につながってくる。それについては、S・ホフマンがつぎのように言っている。

「彼はフランスのさまざまな伝統を総合したのだった。フランスに対する彼の愛情は、アンシャン・レジームの特徴と十九世紀フランスの民主主義者の感情を結びつけていた。彼がフランスに抱くイメージは、

フランスのユニークな性格を保存したいという強烈な意欲とフランスの価値の普遍性に対する意識とを結びつけていた。彼自身の価値には信仰と理性が含まれていた。偉大さへの欲求は、過去の栄光を刷新に結びつけていた⁽⁹⁴⁾。

ド・ゴールのフランスに対する愛着は古風で頑固であった。S・ヒューズが言うように、愛国主義に対して誠実だった⁽⁹⁵⁾、と考えてよいかもしれない。

ド・ゴールとナシヨナリズムの関係は非常に重要なテーマであるが、ここでは二点だけ指摘しておきたい。第一に、一八九〇年以降、右翼の政治思想の共通基盤は、近代社会を批判するナシヨナリズムであった。フランスではとくにモリス・バレスが重要であるが、ド・ゴールの『大戦回顧録』の本章でも引照したフランスの栄光を称える書き出しは、バレスの叙述と非常によく似ている⁽⁹⁶⁾。ド・ゴールはさらに、ナシヨナリズムに関して、モラスやペギーの影響を受けていることも指摘されなければならない⁽⁹⁷⁾。

しかし、第二に、ド・ゴールだけがナシヨナリストではなかった。ヴィシー政権の基本精神が「労働・家族・祖国」であったことに注意しよう。ヴィシー派から見れば、ド・ゴールこそ、フランスの暗黒の時代にフランスを見捨てて、アングロ・サクソンの掌中に飛びこんだエミグレではないか、ということになる。W・D・アーヴィンはその著『危機におけるフランスの保守主義』のなかでフランスの穏和派「共和連合」のほとんどすべてがヴィシー政権を支持したことを実証している⁽⁹⁸⁾。

すくなくとも、一九四二年までは、ド・ゴールが率いる「自由フランス」は、ナシヨナリズムの点ではヴィシーと共通の面が多い⁽⁹⁹⁾ことを考えておきたい。

最後に、それにしてもド・ゴールは保守主義者であるか、という問題に簡単にふれておこう。第一節で紹介

介した小松による保守主義の五つの特質に、本章でのべたド・ゴールの初期の政治思想はすべて重なるものをもっている。しかし、それと同時に、ド・ゴールの一九四〇年六月十八日の思想と行動は、丸山の言う反動ではないか、という問題も出てくる。「ミュンヘンの宥和」「フランス休戦」の動向に対して、これを押しかえそうとする試みをなした、という意味である。しかし、そうするとフランスのレジスタンス運動も反動だというふうに拡張されすぎてくる。ここでは文字通り「抵抗」だと考えてよい。抵抗はどのような価値から生まれてくるのかは一般的には重要な問題であるが、ド・ゴールの抵抗は保守主義から出たのだ、というのが筆者の私見である。

横田地は「保守主義者のバランスや妥協の感覚は、一般に得がたいものであるのみならず、……フランスでは不安定で弱いものにおわらざるをえない」としている。

たしかに、フランスではすべての党派が「保守」という呼称を避けたから、保守は弱いものとみることでもできよう。また、理論としても、ド・ゴールが愛読したベルグソンやペギーを保守主義と一括するのはかなりの無理がある。しかしながら、生活態度としての保守主義、冒頭に指摘した「心性に深く刻みこまれた」保守主義ならば、どうであろうか。それは政治思想とはいえないという観点もあるだろうが、「風潮」や「時代精神」を重視するならば、サン・シール陸軍士官学校や外務省(Quai d'Orsay)の保守主義といった環境も問題にしてゆきたいのである。

それにしても、第二次大戦前夜のフランスで、保守主義は存在しないか弱いのだろうか。たしかに、ド・ゴールの行動は、唐突で成算がないようにみえた。政治的バランスや妥協の問題を無視した一軍人の暴走であったのであろうか。その面も全然なかったとはいえないが、彼の主張と行動には一定の根柢があったこと

は、すでにのべた。では、思想家として行動したのだろうか。しかし、ド・ゴールは、現実感覚や状況判断のセンスにおいて、バレスやモーラスとは基本的に異なっていた。彼が『アクション・フランセーズ』紙は読んでいたが、「アクション・フランセーズ」組織には近づかなかったことも追加しておこう。

むしろ、ヴィシー派に流れ込んだフランスの多数の保守派の人たちよりも、長期的な戦略のなかで「フランスの栄光」を保守した意味において、ド・ゴールははるかに保守主義者であった。ド・ゴールをフランス人の典型とするならば、フランスの人々は当惑するのではないだろうか。しかし、エトランゼとしての、筆者の実感では、ド・ゴールはフランス人をよくあらわしていると思うものである。彼の初期の政治思想に接近した理由もそこにある。

- (1) A. Akoun et al., *Dictionnaire de politique: le présent en question*, Paris, 1979, p.76.
ただし、この辞典では保守主義者 (conservateur) の項目で、政治思想またはイデオロギーとしての保守主義の歴史の変遷について言及されている。そこでの興味深い点を紹介すれば、「イギリスと違って(この語の否定的な含意は、とくにフランス世論では反動と同義語に受取られすぎるので、すべての党派がその呼称を避けた」というところである。(Ibid., p. 75.)
- (2) Rudolf Vierhaus, *Conservatism*, in Philip P. Wiener (ed.), *Dictionary of the History of Ideas* (New York, 1968, 1973), pp. 477-485.
- (3) この保守主義の定義者はさらに別のところで「保守的な心情は社会と国家を区別しないし、道徳と政治を区別しない。社会は、宗教や神話さらに年長といったもので正統化されたリーダーシップや、既得権によって、支配されると考え、しかもそういう考えが普遍的に神聖であり、自然の秩序であるとするのである」とらうている。Ibid., p. 479.
- (4) 小松茂夫「保守の価値意識」岩波講座『現代思想』V(反動の思想)、岩波書店、一九五七年、所収、二二九—三二一頁。

- (5) 保守主義を論じたもので、それ自身がイギリス政治史上の古典となっているものの邦訳として、ヒュー・セシル、柴田卓弘訳『保守主義とは何か』、早稲田大学出版部、一九七九年、がある。なお、原著は一九一二年刊である。
- (6) 丸山真男「反動の概念」、前掲、『現代思想』V、所収、九頁。
- (7) Cf., J. P. Mayer, *Political Thought in France from the Revolution to the Fifth Republic*, Third ed., London, 1943, 1961, pp. 71-120. (五十嵐豊作訳『フランスの政治思想』岩波書店、一九五六年、一四七—二四三頁)。また、Roy Pierce, *Contemporary French Political Thought*, New York, 1966 は、A・ムーニエ、S・ヴェーエ、A・カント、J・P・サルトル、B・トマ・ジュヴェネル、R・アロンをとりあげ分析したものであるが、このような視角と筆者のフランス保守主義のとりあげ方は異なっている。
- (8) Cf., François Goguel, *La politique des partis sous la III^e république*, 4^{ed.}, Paris, 1958.
- (9) Jean Touchard, *Histoire des idées politiques*, tome 2, *Du XVIII^e siècle à nos jours*, 7^{ed.}, Paris, 1975, p. 831.
- (10) Malcolm Anderson, *Conservative Politics in France*, London, 1974, p. 65. なお、本書についての全般的な紹介は、第八章、参照。
- (11) Jean Touchard, *L'esprit des années 1930*, in publié sous la direction de Guy Michaud, *Tendances politiques dans la vie française depuis 1789*, Paris, 1960, p. 110.
- (12) *Ibid.*, p. 103.
- (13) M. Anderson, *op. cit.*, pp. 65-66.
- (14) Stanley Hoffmann, *Decline or Renewal? France Since the 1930s*, New York, 1974, p. 8. (天野恒雄訳『革命か改革か』白水社、一九七七年、二十七頁)。
- (15) *Ibid.*, p. 8. (邦訳、二十六—二十七頁)。
- (16) 柳田陽子「ヴェイシー政府の諸問題——その対独関係と右翼的イデオロギー」日本国際政治学会編『国際政治』第三十五号、一九六六年、所収、九一—一〇頁。藤村瞬一「連合国の内部事情」岩波講座『世界歴史』第二十九巻(第二次世界大戦)、岩波書店、一九七一年、所収、三〇五—三二二頁。

- 中木康夫『フランス政治史』(中)、未來社、一九七五年、一二五—一四〇頁参照。
- (17) André Siegfried, *De la III^e à la IV^e république*, Paris, 1956, p. 79. ルネ・レモンによれば、「フランス国民は、ド・ゴールのよびかけに耳を貸さなかった。彼らはヴェルタンの勝利者、ペタンを信頼していた。一九四〇年七月にペタンの後に従ったのは右翼だけではなかった。理性的理由であれ、あきらめであれ、国民の大多数は彼に同意したのだ」としている。René Rémoud, *La droite en France: De la première restauration à la V^e république*, tome 2, Paris, 3^e ed., 1968, p. 248.
- (18) A. Siegfried, *op. cit.*, pp. 80-81.
- (19) *Ibid.*, p. 83. ワースは「ペタンは、一九四〇年七月当時にあつて、国民革命なるものをともかくも進展させ、しかもそれが立派なものであるかのような印象を与えることを可能にした人——恐らくは唯一の人であつた」としている。アレクザンダー・ワース、野口名隆・高坂正堯訳『フランス現代史』I、みすず書房、一九五八、四二頁。 Cf. Alexander Werth, *The Twilight of France: 1933-1940*, New York, 1942, 1966, pp. 355-359.
- (20) Siegfried, *op. cit.*, p. 84. R・レモンによれば、「家族主義、教権主義、道徳主義、軍国主義、ボーイスカウト運動 (scoutisme) の混合であつた」といふ。R. Rémoud, *op. cit.*, p. 251.
- (21) Siegfried, *op. cit.*, p. 84.
- (22) A・ワース、前掲書、四一頁。
- (23) M. Anderson, *op. cit.*, p. 67.
- (24) S. Hoffmann, *op. cit.*, p. 9. (邦訳、二九頁)。「ヴィシー体制が多面的な体制であつたことにつき、シীগフリードやレモンが指摘する「ペタンのヴィシー」と「ラヴァルのヴィシー」の基本的な違いも想起されねばならぬが、本文では割愛した。 Cf., A. Siegfried, *op. cit.*, pp. 77-93. R. Rémoud, *op. cit.*, p. 247.
- (25) S. Hoffmann, *op. cit.*, p. 10. (邦訳、三〇頁)
- (26) 横田地弘「反動の価値意識」前掲、『現代思想』V所収、二四九—二五〇頁。
- (27) 「レジスタンスは、広く右翼からも募らなければならなかつたし、最初の鼓吹者であるド・ゴールによつて始められなければならなかつた」。René Rémoud, *op. cit.*, p. 246. 加藤晴康はド・ゴールが「フランスの

- 解放を民衆の闘争の自律的展開とは別の次元のもの」と位置づけていたとする。加藤晴康「ヨーロッパにおける対独抵抗運動——西ヨーロッパにおける対独レジスタンス（フランスを中心として）——」前掲『世界歴史』第二十九巻、所収、二二三頁。
- (28) D・トムソンはラヴアルとド・ゴールを対比して論じた有名な著書のなかで、「ヴィシーの統治とドイツの圧制に従わなければならなかった人たちと、亡命するかまたはフランスの海外領土からド・ゴールを支持して戦争を継続した人たちとの間にあった溝は、フランスの人たちにとつてもつとも悲劇的な亀裂であった」(David Thomson, *Two Frenchmen: Pierre Laval and Charles de Gaulle*, New York, reprinted 1975, p. 245.)と述べているが、私見によれば、それは同時に双方ともフランスの保守主義の両面であったと思われろ。Cf. D. Thomson, *Democracy in France*, 2ed., London, 1952.
- (29) Jean Touchard, *Le Gaullisme 1940-1969*, Paris, 1978, p. 16.
- (30) *Ibid.*, p. 16. Paul Marie de La Gorce, *De Gaulle entre deux mondes: Une vie et une époque*, Paris, 1964, pp. 13-17.
- (31) 第六章「一五——一五六頁」M. Anderson, *op. cit.*, pp. 157-158. Frederic H. Seager, *The Boulanger Affair: Political Crossroad of France 1886-1889*, New York, 1969, p. 122.
- (32) シャン・ラクチエールはつぎのように言っている。「ド・ゴール家は、フローベルが、さらにマルクスが解したような意味における、フルシヨフくでは全然なかった。先祖にいささか法官貴族や軍人がいたとはいえ、彼らの多くは、文人、聖職者、高級官吏、それに学識者、地方作家、裁判所書記官などであった」(Jean Lacouture, *De Gaulle*, Paris, 1965, pp. 5-6. (持田担訳『ド・ゴール』河出書房新社、一九七二年、一八一—一九頁)。
- (33) Jean Raymond Tournoux, *Pétain et De Gaulle*, Paris, 1964, p. 18. G・ホヌール、宗左近訳『ド・ゴール』(角川文庫、一九六七年)「一八頁」Cf. Alexander Werth, *De Gaulle: A Political Biography*, Middlesex, 1965, pp. 64-65. (内山敏訳『ド・ゴール』紀国屋書店、一九六七年、四八一—四九頁)。
- (34) S. Hoffmann, *op. cit.*, p. 205. (天野恒雄訳『政治の芸術家ド・ゴール』白水社、一九七七年、三九頁)。
- (35) J. R. Tournoux, *op. cit.*, pp. 20-21.

- (36) S. Hoffmann, *op. cit.*, p. 205. (邦訳'三九頁)。J. Lacouture, *op. cit.*, p. 7. (邦訳'二〇頁)。
- (37) それは、つぎのようになっている。「生涯を通じて私は、フランスについてある種の観念を胸のうちにつくりあげてきた。感情のみならず理性もまた、私の心に、それを吹き込むのである。……わが国は、そのあるがままの姿で、これまたそのあるがままの他国のなかに伍しつつ、死にいたる危険を冒しても高き目標をさだめ、毅然として立たねばならない」と。つまり私の考えでは、フランスは偉大をなくしてはフランスたり得ないのである。」 Charles de Gaulle, *Mémoires de guerre, tome 1, L'Appel: 1940-1942*, Paris, 1954, p. 1. (村上光彦・山崎庸一郎訳『エ・コール大戦回顧録 III・呼びかけ・一九四〇～一九四二』みすず書房、一九六三年、六頁)。
- (38) *Ibid.*, pp. 1-2. (邦訳'六頁)。
- (39) J. Lacouture, *op. cit.*, pp. 9-11. (邦訳書、二二―二五頁)。
- (40) A・ワースによれば、エ・コールのノーブルな文体は、十七世紀の説教家ボッシュエと『墓の彼方の回想』のシャトーブリマンの影響を受けていると云う。A. Werth, *De Gaulle*, p. 68. (邦訳'五一頁)。Cf., François Mauriac, *De Gaulle*, Paris, 1964, p. 126. (岡部正孝訳『エ・コール』河出書房新社、一九六六年、一〇八―一〇九頁)。
- (41) J. Touchard, *op. cit.*, p. 19.
- (42) Brian Crozier, *De Gaulle, I, The Warrior*, London, 1973, pp. 20-21. Gordon Wright, *France in Modern Times*, London, 1962, p. 329.
- (43) J. Lacouture, *op. cit.*, p. 11. (邦訳'二六頁)。
- (44) ポワンカレ内閣成立の歴史的背景については、横山信『近代フランス外交史序説』、東京大学出版会、一九六三年、第三章参照。
- (45) Agathon, *Les jeunes gens d'aujourd'hui*, Paris, 1913. 筆者は未見。
- (46) J. Touchard, *op. cit.*, p. 20.
- (47) Eugen Weber, *The Nationalist Revival in France 1905-1914*, Berkeley, 1968, pp. 107-109.
- (48) S. Hoffmann, *op. cit.*, p. 213. (邦訳'五八頁)。

- (47) De Gaulle, *op. cit.*, p. 2. (邦訳「七頁」)。
- (48) J. Touchard, *op. cit.*, pp. 20-21. J. Lacouture, *op. cit.*, pp. 16-18. (邦訳「三二—三四頁」)。
- (49) J. Lacouture, *op. cit.*, p. 27. (邦訳「四五頁」)。陸軍大学の成績は「優」ではなく、「良」であった。その理由はつぎのように記されてあった。「聡明、教養ある真面目な士官なり。才気と能力あり。素質十分。惜しむらくは、過度の自信、他人の意見に対する厳しき、また、その追放中の国王の如き態度により、比類なき資性を損へ」。Ibid., p. 27. (邦訳「四四頁」)。「追放中の国王の如き態度」という表現が興味を引く。
- (50) J. Lacouture, *op. cit.*, pp. 28-29. (邦訳「四七頁」)。
- (51) De Gaulle, *op. cit.*, p. 3. (邦訳「八頁」)。
- (52) P. M. de la Gorce, *op. cit.*, pp. 108-109. (淡徳三郎訳『ド・ゴール』、徳間書店、一九六五年、二九—三〇頁)。
- (53) Ibid., p. 13. (邦訳「一六頁」)。一九三五年三月、レイノーは「契約による軍人から成る、第一線六箇師団、軽装備一箇師団の特殊部隊を創設し、おそくとも一九四〇年四月十五日までにはその戦闘態勢を整える」法律案を国民議会に提案した。しかし、レイノーの案は下院の軍事委員会によって否決された。J. Lacouture, *op. cit.*, pp. 45-46. (邦訳「六八—七〇頁」)。Paul Reynaud, *Memoires, tome 1, Venu de ma montagne*, Paris, 1960, pp. 420-440.
- (54) Touchard, *op. cit.*, p. 23.
- (55) 当時、人々はこの不和を「蝮のからみあひ」と評した。J. R. Tournoux, *op. cit.*, pp. 169-179.
- (56) J. Lacouture, *op. cit.*, pp. 51-52. (邦訳「七七頁」)。
- (57) ド・ゴールの回顧録にはつぎのように記されている。「二月二十六日、私は最後の努力を試みた。政府、司令部、政界の主だった八十名あてに覚書を送り、……説得を試みたのである。」De Gaulle, *op. cit.*, p. 23. (邦訳「二五—二六頁」)。
- (58) とはいえ、副首相にベタン、総司令官にウェイガン將軍を配置したことは、「レイノーにとつても、第三共和制にとつても、思わぬ陥穽となるのである」(藤村瞬一、前掲論文、三〇八頁)。しかし、レイノーにしても好んでした選択ではなかった。P. Reynaud, *Memoires, tome 2, Envers et contre tous*, Paris, 1963,

pp. 385-388.

- (59) De Gaulle, *op. cit.*, pp. 46-48. (邦訳 四六一-四八頁)。奇妙なことに、チャーチルの回想録にはこの日の記述はない。
- Cf., B. Crozier, *op. cit.*, p. 98. Winston S. Churchill, *The Second World War and an Epingue on the years 1945-1957*, London, 1959, pp. 290-291. (佐藤亮一訳『第二次世界大戦』上、河出書房新社、一九五七年、三〇一-三〇二頁)。
- (60) この経緯については Cf., P. Reynaud, *op. cit.*, pp. 412-437. またレイノーの娘の回想記も出版された。 Cf., Evelyne Demey, *Paul Reynaud: mon père*, Paris, 1980, pp. 74-76.
- (61) De Gaulle, *op. cit.*, p. 61. (邦訳 六〇頁)。
- (62) J. Lacouture, *op. cit.*, p. 68. (邦訳 九八頁)。
- (63) De Gaulle, *op. cit.*, pp. 267-268. (邦訳 一七〇頁)。
- (64) マ・ゴールは当時の孤独な心境をこのように回想している。
「このような斜面を歩くのはぼうぼうと思っていた私はいえれば、出発点においてはなにもでもなかった。私のかたわりには、名ばかりの兵力も組織もなかった。……私はいかに制限され、また孤独であったとはいえず、いや、まさしく制限され、また孤独であったからこそ、頂上に達さねばならず、達したらもはやけっしてそこからくだつてはならなかったのである」。 *Ibid.*, p. 70. (邦訳 六九頁)。
- (65) A・ワースによれば、マ・ゴールが四十九歳という年をとるまで「無名」であったのは、二つの事柄から説明できるとして、それは第一に、一九二〇年代から三〇年代にかけて存在していたフランス軍の既成上流特権層、第二に、第三共和制の性質そのものと「悪い習慣」であるという。 A. Werth, *op. cit.*, pp. 54-55. (邦訳 四〇頁)。
- (66) De Gaulle, *op. cit.*, p. 71. (邦訳 六九頁)。
J. Lacouture, *op. cit.*, p. 69. (邦訳 一〇一頁)。
A. Werth, *ibid.*, pp. 102-103. (邦訳 七九頁)。
- (67) Charles De Gaulle, *La discorde chez l'ennemi*, Paris, 1924, 1944, p. V.
- (68) *Ibid.*, p. 2.

- (69) J. Touchard, *op. cit.*, pp. 25-26.
- (70) De Gaulle, *op. cit.*, p. 76. J. Touchard, *ibid.*, p. 26.
- (71) S. Hoffmann, *op. cit.*, p. 214. (邦訳、五九頁)。
- (72) A. Werth, *op. cit.*, p. 69. (邦訳、五二頁)。
- (73) De Gaulle, *op. cit.*, p. x. J. Touchard, *op. cit.*, p. 27. G・ボヌール、前掲書、五七頁。
- (74) De Gaulle, *Le fil de l'épée*, Paris, 1932, 1946, pp. 7-8.
- (75) J. Touchard, *op. cit.*, p. 30.
- (76) De Gaulle, *op. cit.*, p. 159.
- (77) J. Touchard, *op. cit.*, p. 31.
- (78) S・ホフマンは、一九三二年と三四年に書かれた二冊の書物の中に描かれた自画像は、単なる事実上の指揮を越えて政治的手腕へと向かっているとしてゐる。S. Hoffmann, *op. cit.*, p. 22. (邦訳、七六頁)。
- (79) Cf., F. Mauriac, *op. cit.*, p. 38. (邦訳、三〇頁)。
- (80) A. Werth, *op. cit.*, p. 79. (邦訳、六〇頁)。
- (81) De Gaulle, *op. cit.*, p. 50. Touchard, *op. cit.*, p. 32. Werth, *ibid.*, p. 79. (邦訳、六〇頁)。
- (82) De Gaulle, *ibid.*, pp. 51-52. Werth, *ibid.*, p. 80. (邦訳、六〇—六一頁)。
- (83) F. Mauriac, *op. cit.*, pp. 29-32. (邦訳、二二—二五頁)。
- J・ラクチュールはつぎのように言っている。「剣の刃」は輝きと高い語調を有する論文であり、ひとりの人物を明示し、ひとりの作家を立証した。……ド・ゴールが自分の手で刻み上げた、豪胆で非人間的で、秘密に満ちたこの巨人像。……歴史家と歴史上の人物、観察する自我と行動する自我、明晰な意識と運動しつつある歴史の、あの二にして一なる関係が早くもここに始まっている。J. Lacouture, *op. cit.*, p. 37. (邦訳、五八—五九頁)。
- (84) B. Crozier, *op. cit.*, p. 49.
- (85) Mauriac, *op. cit.*, pp. 25-27. (邦訳、一七一—一九頁)。
- (86) ド・ゴールのこの著書が、ボヌールのように、「ドイツでは、翻訳されるやいなやたちまち数千の人々から

- ひじばりだこになつた」(前掲書、八〇頁。)というのは、神話化しすぎている。最新理論というのでもなかつた。むしろ、社会において軍隊のはたす役割を、著述家としてまとめた、というのがふさわしい。B. Crozier, *op. cit.*, pp. 64-66.
- (87) De Gaulle, *Mémoires de guerre, tome 1*, pp. 6-10. (邦訳、一〇—一四頁)。なお、邦訳では、書名が『機軸化部隊ごむかひ』と意訳された。
- (88) Charles De Gaulle, *Vers l'armée de métier*, Paris, 1934, 1944, pp. 81-82. P.-M. de la Gorce, *op. cit.*, pp. 100-101. (邦訳、二七頁)。
- (89) De Gaulle, *ibid.*, p. 42-43. F. Mauriac, *op. cit.*, pp. 41-42. (邦訳、三三—三四頁)。
- (90) De Gaulle, *ibid.*, pp. 229-230. *Id.*, *Mémoires de guerre, tome 1*, p. 10. (邦訳、一四頁)。
- (91) Charles De Gaulle, *La France et son armée*, Paris, 1938.
- (92) G. R. エルトン、丸山高司訳『政治史とは何か』、みすず書房、一九七四年、七一頁。
- (93) F. Mauriac, *op. cit.*, p. 39. (邦訳、三二頁)。
- (94) S. Hoffmann, *op. cit.*, p. 200. (邦訳、前掲書、三三三頁)。
- (95) スチュアート・コーズ、荒川幾男・生松敬三訳『ちががれた道——失意の時代のフランス社会思想一九三〇—一九六〇』、みすず書房、一九七〇年、一〇〇頁。
- (96) Cf., M. Anderson, *op. cit.*, p. 341.
- (97) Eugen Weber, A Persistent Prophet—Peguy, *The French Review*, Yale, 1954, pp. 337-345.
- (98) William D. Irvine, *French Conservatism in Crisis: The Republican Federation of France*, Baton Rouge, 1979, pp. 204-230.
- (99) M. Anderson, *op. cit.*, p. 303. M. H. エルボウは、コーポラティズムにおいてペタンと第四共和制のミ・トールを共廻しする。Cf., Matthew H. Elbow, *French Corporate theory, 1789-1948*, New York, 1953, p. 11, pp. 202-203.
- (100) 横田地弘「反動の価値意識(承前)」岩波講座『現代思想』VI、岩波書店、一九五七年、所収、四一六頁。
- (101) レイノーデットの戦争挑発者として非難された。George Lichtheim, *Europe in the Twentieth Century*,

第7章 初期ド・ゴールの政治思想

(102) London, 1972 p. 133. (塚本明子訳『ヨーロッパ文明』、みすず書房、一九七九年、一七二頁)。
J. Lacouture, *op. cit.*, p. 46. (邦訳、六〇頁)。

第八章 M・アンダーソン「フランスの保守政治」（紹介）

Malcolm Anderson, *Conservative Politics in France*, London, 1974.

本書は、一八八〇年から現在までのフランスの保守政治を概観したものである。フランスの右翼は最初は一時的な弱い結社であったが、現在では比較的によく組織されたド・ゴール派のかたちとなっている。この期間の人脈、政治的事件、組織はいかなるものであったかを総合的に考察したのが本書である。大戦や植民地戦争は、第三共和制や第四共和制に見られるごとく、一つの体制の終りであり、さらに政党組織に終焉をもたらした。にもかかわらず、この期間を通して、綿々とつづく貴族階級や伝統的な大ブルジョワジーのゆるもろの影響、大多数の農民と特殊な政治様式をもたらす地方的社会制度の残存、これらが織りなすフランスの保守政治の実態は何か、が問われているのである。とくに、全国的な政治レベルにとどまらず、地方の政治構造にかなりの叙述がさかれている点は注目すべきであろう。著者のアンダーソンはウォーリック(Warwick)大学の政治学の教授であり、フランス政治が専攻とみえフランス関係の論文が実に多い。有名なセント・アントニー・ペーパーズ・シリーズの第十三集に収められている論文 *The Right and the Social Question in Parliament, 1905-1915* in D. Shapiro (ed.), *The Right in France 1880-1919*, *St Antony's Papers*, No. 13, 1962, pp. 85-134. & 『ボリテュカル・スタディーズ』誌に掲載された二論文 *The Myth of the Two Hundred Families*, *Political Studies*, vol. 13, 1965, pp. 163-78. & *Regional Identity and Political*

Change: the Case of Alsace from the Third to the Fifth Republic, *Political Studies*, vol. 20, 1972, pp. 17-30. などがそれをよく示している。アメリカにおいてもそうであるが、イギリスにおいてもフランス政治の研究のおびただしい蓄積に圧倒されてしまう。アンダーソンにおいても、大はフランス政治史の古典的な著作から小は地方の一時期だけの小さな新聞、結社のパンフレットまで渉獵されており、その博引旁証には驚かされるのみである。フランス政治に関する外国からの研究でしかも概説書である本書を紹介するゆえんもそこにある(いなむしろ概観のほうがフランス政治を理解するよりよい視座をあたえてくれるかもしれない)。

さて本書の構成は序論と結論を除けば全体で七つの章に分れている。それらをあらかじめ記せば、第一章「保守政治の変遷——人と事件・一八八〇年〜一九五八年」、第二章「保守社会」、第三章「二十世紀初頭の政治組織」、第四章「大戦間時代の熱情と先導」、第五章「第四・五共和制期の『独立派』と議会内右翼」、第六章「第二次大戦後の極右」、第七章「ド・ゴール派」となっている。大ざっぱに言って第一章と第二章が総論的部分、第三章から第七章が各論的部分であり、歴史的な順序でのべられている。そこでこの紹介では第一章と第二章はやや詳細にのべ、第三章以下は重点的にとりあげてみよう。

まず第一章であるが、ここではフランスの保守派の動向が、一八八〇年から一九五八年五月ドゴールが権力を掌中におさめるまで、全期間にわたって総括されている。フランス第三共和制以降の政治史は共和派勢力がしだいに定着する過程だととらえてよいが、本書の主題である保守派は共和制という新制度にどう適応を拒否したか。著者によれば十九世紀後半、第三共和制初期の保守派の戦略的弱点は次のようなものであった。第一に、普通選挙という制度そのもの。旧体制からの政治指導階級である保守派はこれに組織的に対応

できるわけではない。第二に、目標の不明確。共和制制度の改革 (revision) ではあまりにも一般的すぎだし、もともと目標といってよい忠誠の人的対象である王家の世継ぎがあいついで死亡した。すなわち皇帝の王子は一八七九年、シャンポール (Chambord) 伯は八三年に他界した。第三に、共和派にはベルヴィル (Belleville) 綱領があったが、保守派には対置できる何ものもなかった。第四に、共和派のリーダーであるガンベッタ (Gambetta) やフェリ (Ferry) のような人物は穩健な立場をとり、保守派に乗じる隙をあたえなかった (二七頁以下)。ブーランジェ事件は共和制転覆の陰謀であったが失敗し、右翼はいつそう後退する。ただ著者は若いブーランジェ派の議員モリス・バレス (Maurice Barrès) に象徴されるような、都会的な低中産層から出た反ユダヤ主義的性向をもった過激右翼 (radical Right) に注目している (三三頁以下) ことは銘記しておきたい。教会側の共和制容認であるラリマン (Ralliement) はこのような情勢のもとで、第一に信用を失った反共和派の回復のために、第二に対独復讐を中心に大衆の間にナシヨナリズムが蔓延してきたこと、第三に穩和共和派との接近、などの要因が折り重なって実現された。だが実際的な影響はあまりなかった。むしろドレフェス事件の共和派の成功のほうが大きかった。著者は今後の展開の布石の意味をこめたのか、ラリマンと提携するプログレシスト (Progressiste) のメリーヌ (Meline, J.) から袂を分かつポワンカレ (Poincaré, R.) の左派共和派 (Républicains de Gauches) の動向を追っている。ポワンカレこそは「のちの神聖連合 (Union sacrée) の支柱となる人物である。」

著者は続いて一九〇六年頃までに左派が反教権主義だけでなく他の政策にも勝利をおさめたことを概観したのち、一九〇六年から九年までのクレマンソー、つぎのブリアン内閣にいたって、主としてストライキ弾圧政策などから、右翼が議会で永久の反対派であることをやめる過程をのべる。すなわち右翼は時の内閣に

支持を受けいれる用意があり、中央派で穏健な政府であるならば、たとえ反教権主義の政府であっても、賛成票を投じたのであった。この傾向は第一次大戦の開始でいつそう強化される。ポワンカレの神聖連合がそれである。「議会における右翼の誰一人として戦争を支持することをためらわなかった」(四六頁)。一九一四年以降、政府はすべての立場の支持を必要としたし、支持するものは好意的にみられた。このようにして右翼は反対派から協力派になり、復活したのだった。この背景にあるのは、著者によれば、ナシヨナリズムというイデオロギーであり、また戦時の内閣が強力なリーダーシップをとり、議会から最少限の干渉しか受けなかったからであった。右翼は議員に操作される内閣に反対していたのである。

第一次大戦後の国民連合 (Bloc National) も、国民の団結をフランス再建のために平和時に延長させて、ドイツのヴェルサイユ条約の厳格な履行を強制し、ロシア・ボルシェヴィズムに対して文明を擁護するという対外的目的を果たすべく実現された。エリオ (Herriot, E.) の左翼連合 (Cartel des Gauches) のあと権力はふたたびポワンカレに戻ってくる。その訳は、著者によれば、第一に、エリオのドーズ案受諾に対する国民の不満であり、第二に、左翼連合の財政の失敗であった(五三頁以下)。ポワンカレの国民連合 (Union Nationale) の支持基盤は経済不安に脅かされた小市民 (petites gens) や退職者 (rentiers) にあったのである。ポワンカレがいかに期待されていたかは、彼が首相になるやいなや、フランの価値が十五%も上昇したことにうかがえよう。右翼優位は一九二九年タルデュー (Tardieu, A.) の登場で一変する。著者によれば「たしかにタルデューは財政安定政策を継承していたが、政治姿勢はより近代的ダイナミックな保守主義」(五五頁) であった。右翼は精力的に支持したりしなかった。だが重要なのは、タルデューの失敗はその当時の政治制度のもとでは新しいリーダーシップが不可能であったからだ、という著者の見解である。これは

のちのヴィシー政府あるいはド・ゴールなどと関連して興味深いと思われる。第一次大戦後当初は右翼は共和制制度を受け入れたようであった。しかし「一九三〇年代になると右翼が諸制度を擁護することについてあてにならないことが明白になってきた」（五八頁）。深まりゆく経済危機、悪化する国際情勢は、激化する反議会的大衆運動と結びついて、政治秩序への信頼感が失われつつあった。このような状況で、スタヴィスキ（Stavisky）事件が引き金となって、一九三四年二月六日の騒動が議会の腐敗にむけて爆発した。その結果、タルデュエーやラバル（Laval, P.）が入閣する三四年のドゥーメルグ（Doumergue）内閣以降、人民戦線までの内閣は、いずれも右翼色の強いものとなる。それ故、急進社会党は社会党、共産党の側に回り人民戦線が成立するわけだが、人民戦線下において多発するストライキの中でブルジョワジーはいかに扱われたか。著者はS・ヴェーユ（Weil, S.）の『根をもつこと』（L'Enracinement）からつぎの箇所を引用する。年若いブルジョワジー達に関して言えば、「彼らにはなんの危害も加えられなかった。ところが、彼らは恐怖をいだいてしまったのだ。屈辱を受けたからである。しかも彼らは、自分たちより劣っていると考えていた人間たちから屈辱を受けた」（山崎庸一郎訳、『シモーヌヴェーユ著作集』V、一六八頁）。このことが階級緊張を高め、右翼はプチ・ブル的立場に立つ急進社会党を、人民戦線から引き離すことに成功した。著者のヴィシー政府観は「ヴィシーの挿話は短かったとはいえ大変な複雑さをもっており、平和時に眠っていたか、あいまいなままになっていた右翼の熱情と性格がたくさん暴露した」（六七頁）ことにある。初期のヴィシー体制はよく組織された資本家や組織労働者を犠牲にして中間階級や低―中間階級に好意的であろうとした（六九頁以下）という指摘も新鮮な感じがする。さらに、それに重なると思われるのは、対独抵抗運動のド・ゴールの「自由フランス」にふれて、「運動の指導者の性格と宣伝される昂揚したナショナリズムは右翼の運動

であるという印象をあたえた」(七三頁) という点である。これらは著者がタルデューーヴィシード・ゴールにたんなる不連続だけでなく、一つの連続した反第三共和制思考を抽出化させているように思われる。それがフランスの保守政治の眼目であると言いたげである。それは戦後政治のなかに、たとえば一九五二年のピネー(Pinay, A.)内閣をポワンカレ以来の成功であり、ヴィシー問題でダメージを受けていた穏和派を最初に復活させた(八一頁以下)とか、C N I Pを社会的名声と議席を失った名士たちのための仲立ち人ないしは指導者(八七頁以下)として位置づけているところにもうかがわれる。

つぎに第二章であるが、著者はここで、第一章にみってきたようなフランス保守政治の歴史の下部に構造化している保守社会、というものを描きだそうとする。そのためにフランス保守主義を、まず地域的に都会の代表としてパリ、田舎の代表としてブルターニュ(Bretagne)、アルザス(Alsace)、バツス・ピレネー(Basses-Pyrénées)諸地域を検討する。順に紹介してみよう。まずパリであるが、これは首都であることと急速に都市化が進むという条件が作用して、パリ出身の議員が逆に地域主義的になりすぎる傾向があることが指摘される(九四頁以下)。つまりパリ人の尊大さとコネの強さが議員を縛るわけだが、この面が右翼の議会外の運動に影響すると、地方の意見と運動はパリにおいて創り出されるといふ自負となつて、議会外右翼の運動はパリに限定されてしまうのであった。アクション・フランセーズ(Action Française)はそのよい例であった。つぎにブルターニュは、第五共和制のド・ゴール派の登場でパリに追い抜かれるが、それまでは右翼の議員を一番多く選出した地域であった。有名なA・シーグフリード(Siegfried, A.)のTableau politique de la France de l'Ouest, 1913. という著書でも、カトリック・教権主義・保守主義で共和感情の少ない地域として描かれる(一〇〇頁以下)が、ここでは二つの点だけ紹介しておこう。第一に、支配層とし

ての城 (Chateau) Ⅱ 貴族と教会の同盟の裂け目が、一八九〇年代よりあらわれて、キリスト教民主主義の思想が下級聖職者の間に拡まる足がかりをつくりだしたこと(一〇三頁以下)。第二に、一九五〇年を画期としてルネ・プレヴァン (René Plevan) にひきいられる「ブルターニュ利益統合研究委員会」(Comité d'Etudes et de Liaison des Intérêts Bretons = CELIB) が形成され、地域利益を主張し、右翼の政治方向をもつには違いないが、必ずしもドゴール派の中央集権的近代化とは異なる方向がある点である(一〇六頁以下)。アルザスは、一九六八年の選挙で、ドゴール派が第一次投票で全員当選したことからわかるように、教権主義の強い地域のなかで、ドゴール派の一番強いところである。いうまでもなくアルザスは他の地域とは歴史的経緯において異なっている。すなわち、アルザスは一八七〇年から一九一八年までほぼ四〇年間ドイツ統治下にあった。ドイツ統治下のもので、アルザスは、織物工業の発達とフランスよりは整備された運輸体系によって、著しい経済成長をとげ、住民は満足することになる(一一一頁以下)。したがって、アルザスがフランスに戻ってきた時、フランス語を理解できる者はわずか八%だった。アルザスがある期間ドイツに同化したことは、より具体的に言えば、一八七〇年以前の支配階級、教員などのインテリは亡命して、カトリック教会が支配の空間をうめたことになる。以後この地方はカトリック勢力の強いところとなるが、ちょうど七〇年代のビスマルクの反教権的「文化闘争」(Kulturkampf) に対し地域愛主義 (local patriotism) を強め、ドイツのカトリック政党である中央党 (Zentrum) と協力をふかめてゆく。現在のド・ゴール派が勢力を誇るのは、ド・ゴールが第二次大戦末期ドイツの再占領から中心都市ストラスブール (Strasbourg) を救ったとか、ドゴール派の創設者の一人ルネ・カピタン (René Capitant) がストラスブール大学法学部教授であったということより、象徴的にいえば「ド・ゴール派がアルザス人のための国民的自覚 (national identity) の問

題を、MRPよりはるかに効果的に明らかに中央党の後継者として解決した」(一一五頁)からである。一九六七年からピレネー・アトランティック (Pyrénées-Atlantiques) と呼ばれているバス・ユレネー (Basses-Pyrénées) 県はベアルン (Béarn) 地帯とペイ・バスク (Pays Basque) 地帯にわかれる。どちらも第三共和制の初期から少数の例外をのぞいて右翼が完全に支配してきたところである。とくにバスク地帯の後進性は著しく「一八六〇年代、検事総長が、多数の町村でフランス語がまったく知られておらず、市長の半分はフランス語が話せないことを嘆いた」(一一八頁)ほどである。兵役義務を延長する「三年法」を成立させた国家主義右翼 (nationalist Right) のバルトウー (Barthou) がベアルン選出であり、ベアルン人の感情に一致している (一一八頁以下) こともこの県の保守性を物語るものといえよう。

著者は、第二章の後半部分を、教会、軍隊、貴族、ブルジョワジーの順でフランスの保守政治を支えてきた社会層を分析している。ここでは、そのなかでとくに興味深く思われるノール (Nord) 県の経営者階級 (patronat) について紹介しておこう。著者によれば、ノールの経営者 (patronat du Nord) ほどフランスのブルジョワジーの典型的なものはない(二五七頁以下)。ノールの経営者は財力と伝統というブルジョワジーの特質を結びつけていた。十九世紀のノール県の経済成長の主な要因は鉱山業と織物業であるが、ここに主として抽出されるのは中規模経営で同族的経営を特色とする北部に発達した織物業である。これに関連するノール県のデモグラフィックな特殊性として、村落に住む人口が五〇%を割るのは一九五四年以降であり、逆にいえば五万人以上の都市に住んでいる人口が一九五四年では八分の一にみえない事実がある。これは織物業(主としてリンネル)が農業人口が多いこととむしろ両立したことをしめしている。さらに、このことが、一般に言われるような工業労働者とは違った社会的行動を、とらせることになる。「織物労働者の

問では二十世紀まで宗教行為は共通していた。北部の経営者も、十九世紀中葉のヨーロッパの他の経営者と違って、カトリックのままだった」（一五八頁）。経営者の理念は温情的（paternalist kind）な社会正義であり、社会や宗教の問題に関する伝統的な態度は、工業経営の保守主義に裏打ちされていた。温情的なものは経営形態が同族のネットワークであったことから当然出てくる。このノールの経営者の政治史におけるもつとも顕著な特徴は、第三共和制の前半期の彼らの一番影響力のあった期間において、彼らが他のどの組織も持たなかった政治的結合力（political coherence）をもっていったことである。同族的きずな、隣接関係、経営利益、同じカトリック教区などでつながったノールの経営者名士層は、彼らの経営と政治活動を同一線上においたのだった。結局、ノールの織物経営は、一九三〇年代まで、相互の競争は適切であるという、小さい中規模経営の原型的な資本主義を表現していた。そしてこの種の工業形態はほとんど神話的なかたちとなつて右翼の支持を得た。大戦間期の比較的ゆるい経済成長はこのパターンを保持しえた。そしてフランスの全地域において地域的自給自足（regional autonomy）という古い形態を崩そうとする外的要因——人口と資本の移動、国家的ないしは国際的企業の発達、急速な経済成長と経済計画——は一九五〇年代まで強くはなかった。しかし五十年代以降の「これらの変化は右翼勢力の大きな団結の可能性のある社会文脈を作り出した」（二六三頁）。それがド・ゴール派である。ここに右翼の二局面が見られる。ノールの経営者にみられる戦前型と、右翼勢力を団結させてゆく中央集権的な戦後型である。われわれはその対比をブルターニュを紹介した時にも見出していた。だが対比の強調は単純化を導く。ノール経営者型の右翼は戦後にも存する。たとえばアントワヌ・ピネー（Antoine Pinay）とジョゼフ・ラニエル（Joseph Laniel）がそうである。

第三章は、二十世紀初頭の諸政治組織の検討である。とくに「フランス愛国同盟」（Ligue de la Patrie

Française)と「アクション・フランセーズ」(Ligue de l'Action Française)が分析されるが、民主的司教(abbés démocrates)について、教会を保守主義から解放しようとした異端ではあるが、しかし後年のMRPからみて先駆的な運動である(一七一頁)と指摘している点は興味を引く。

第四章は、大戦間時代の「クロワ・ドゥ・フー」(Croix de Feu)をはじめとする議会外右翼の団体——著者は諸リーグ(Ligues)と呼ぶ——の分析。ここで重要なのは著者がこれらの諸リーグはポワンカレのような著名な右翼の政治家と「深くつながっていない」(二三〇頁)と指摘している点である。諸リーグは議会の外で騒いだにすぎなかったと言えよう。

第五章は、第四共和制と第五共和制における中道右翼の系譜を追跡している。具体的にいえばデュエシエ(Duchet, R.)からジスカール・デスタン(Giscard d'Estang)へのリーダーに象徴される変遷過程である。著者によれば前者は戦前型の右翼であるが、後者は新しいタイプの右翼であるという。

第六章は第二次大戦後の極右の動向である。いずれも規模は小さいのであるが、予想以上に著者はプジャード(Pujade)派にきびしく、逆にいえば重視していない(二七八頁以下)ように思われた。

では、フランスの右翼の集大成といわれるド・ゴール派とは何なのか。第七章を中心にして紹介してみよう。第五共和制のド・ゴール派は「中央派」(Centre)の政党としてたまたま右翼の票を引きつけるのに成功したといえるかもしれない。しかし、ド・ゴール派の成功は、右翼の政治家がド・ゴール派に連合しなかったらありえなかったことも事実である。財力のある者、才覚のすぐれている者は、ド・ゴール派の選挙の勝利が古典的な右翼(la droite classique)を潰す前に、連合したり参加していた。ただ、「ド・ゴールの評判、彼の支持者、一般的な政治状況は彼が指導権を握った一九四〇年、四七年、五八年の三つの時期それぞれに

異なるものである」(三〇一頁)。したがってド・ゴール派の一貫していない政治姿勢の中にこそ、第五共和制の「中央派」の、いなむしろ現代フランスの右翼の意味があると著者は言っているようである。

まず、ド・ゴールが一九四二年まではほとんど共和制について語らなかったことに注目しよう。「自由フランス」運動では自由・平等・博愛というモットーは名誉と愛国というモットーに置きかえる」(三〇三頁)と主張したぐらいである。事実、一九四二年までは「自由フランス」運動のナシヨナリズムはヴィシー体制のそれと似かよっており、ただ第二次大戦終了前の二年間は社会問題に前向きになり、反共宣伝もほとんど消えたのであった。次に、一九四七年四月に結成される「フランス人民連合」(Rassemblement du Peuple Français＝RPF)であるが、これは「かつてPSFがそうであり、タルデューが彼の経歴の終り頃そうであったように、反議会主義であり、三者とも議会の不安定な連合に依存する行政のシステムに反した」(三〇五頁)という性格をもっていた。一九四九年のリールの集会(Assemblées)で確立された綱領によると、「資本労働協会」(Association capital-travail)をつくりそこで働く労働者は豊かになることによって階級闘争は終り、「教育支給」(allocation-éducation)によって国家がとくにカトリックの私立学校を援助して教権と反教権の不和を解消させる(三〇七頁以下)ことを主目的としていた。ド・ゴールに親密なマルローによればRPFは「地下鉄のラッシュアワー時の群集」の希望をかなえるという。しかしド・ゴールが復帰したのはアルジェリア戦争によるフランスの混乱においてであった。と同時にそこに取引きがあり、ド・ゴールは忠臣スーステル(Soustelle)を切ることになる。「その結果はフランス的アルジェリア(Algérie française)ローリーの敗北だった。スーステルは彼がUNRの中央委員に選出されなかった時に個人的には敗れたのであった」(三一七頁)。つまりRPFから脱脚してUNR＝「新共和連合」(Union pour la Nouvelle République)

という大政党確立のためには「フランス的アルジェリア」を支持する一翼は排除する必要があったわけである。もちろん、ド・ゴールを待望していた世論が長期に継続していたからこそ、ド・ゴール派は以後圧倒的優勢を誇ることができたわけで、著者はド・ゴール研究家ジャン・シャルロ (Jean Charlot) によりながら三つの基本的な世論の傾向を要約する(三二二頁以下)。第一に、中立あるいは反アメリカ感情からくる国家的独立の願望。第二に、議会の効力は多少犠牲にしてもよいから政府を安定させてほしいという願望。第三に、以前の二つの共和制がそうであったような多党制ないし議員内閣制によって不可能になっていた首長選出の願望。以上をド・ゴールはたくみに吸収して、ド・ゴールの第五共和制を構築したのであった。

さて、ド・ゴールの死後、ド・ゴール派のみならずフランスの右翼は何処へ行くのか。本書の結論が次のようになっているのは、まことに象徴的といえよう。ド・ゴール派は、ド・ゴールの死後、「理論や綱領に積極的な要素があるわけではないから、他の先進国の保守政党に類似してくるだろう。しかし他の国の保守政党のいくつかによって所有されている永久の雰囲気 (aura of permanence) を得るためには選挙の敗北と一定期間のリーダーシップの不在という事態をこうむる必要がある」(三四七頁)。以上、いささか乱暴に紹介してみたが、本書の価値は、第一にフランスを全体としてとらえることにほぼ成功したこと、第二にフランスの右翼に保守派に着目してフランスの共和制あるいはデモクラシーを別の側面から描き出したこと、第三に社会に(そして地方に)関心領域を拡大し保守政治をたんなる党派や政治家の指導権争いに限定しなかったことにあるのではないかと思う。本書のなかに多数見出された仮説、ヒントをモノグラフィーに高めてゆくのは著者の言うように読者(ここでは紹介者)の義務かもしれない。